

4. 単純な価値形態の全体 4.Das Ganze der einfachen Wertform (p81/原p74)2025/06/23

(1) ある一商品の単純な価値形態は、他の、異種の一商品に対するその商品の価値関係の内に、即ち、交換関係のうちに、含まれている。商品Aの価値は、質的には、商品Aとの商品Bの直接的交換可能性によって表現される。商品Aの価値は、量的には、商品Aの与えられた量との商品Bの一定量の交換可能性によって表現される。言いかえれば、一商品の価値は、それが「交換価値」として表示されることによって独立に表現されている。

・・・商品は、使用価値または使用対象であるとともに、「価値」なのである。商品は、その価値が商品の現物形態とは違った独特な現象形態、即ち、交換価値という現象形態をもつとき、そのあるがままのこのような二重物として現れるのであって、商品は、孤立的に考察されたのでは、この交換価値という形態を決してもたないのであり、つねにただ第二の異種の一商品に対する価値関係または交換関係のなかでのみこの形態をもつのである。

(2) 我々の分析が証明したように、商品の価値形態または価値表現は、商品価値の本性から出てくるのであって、逆に、価値や価値量がそれらの交換価値としての表現様式から出てくるのではない。ところが、この逆の考え方は、重商主義者達やその近代的な蒸し返し屋であるフェリエやガニルなどの妄想であるとともに、彼らとは正反対の近代の自由貿易外交店員、バステアやその仲間の妄想でもある。重商主義者達は、価値表現の質的な面に、従って、貨幣をその完成形態とする商品の等価形態に、重きをおいているが、これとは反対に、どんな価格でも自分の商品を売り捌かなければならない近代の自由貿易行商人達は、相対的価値形態の量的な面に重きを置いている。従って、彼らにとっては、商品の価値も価値量も交換関係による表現のなかよりほかにはないのであり、従ってまた、ただ日々の物化表の中にあるだけなのである。(p82)

(3) 商品Aの商品Bに対する価値関係の中では、商品Aの現物形態はただ使用価値の姿として、商品Bの現物形態はただ価値形態または価値の姿としてのみ認められているということを示した。つまり、商品の内に内在する使用価値と価値との内的な対立は、1つの外的な対立によって、即ち、二つの商品の関係によって表されるのであるが、この関係の中では、自分の価値が表現されるべき一方の商品は、直接にはただ使用価値として認められるのであり、これに対して、それで価値が表現される他方の商品は、直接にはただ交換価値として認められるのである。つまり、一商品の単純な価値形態は、その商品に含まれている使用価値と価値との対立の単純な現象形態なのである。

(4) 労働生産物は、どんな社会状態の中でも使用対象であるが、しかし労働生産物を商品にするのは、ただ、一つの歴史的に既定された発展段階、即ち、使用物の生産に費やされた労働を、その物の「对象的」な属性として、即ち、そのものの価値として表すような発展段階だけである。それゆえ、商品の単純な価値形態は、同時に労働生産物の単純な商品形態だということになり、従ってまた、商品形態の発展は価値形態の発展に一致するということになるのである。(p83)

(5) 単純な価値形態、即ち、一連の諸変態を経てはじめて価格形態にまで成熟するこの萌芽形態の不十分さは、一見して明らかである。

(6) 一商品の単純な相対的価値形態には、他の一商品の個別的な等価形態が対応する。こうして上着は、リンネルの相対的価値表現のなかでは、ただこの一つの商品種類リンネルに対して等価形態または直接的交換可能性の形態をもつだけである。(p84)

(7)とはいえ、個別的な価値形態はおのずからより完成した形態に移行する。確かに、個別的な価値形態によっては、一商品Aの価値は、ただ一つの別種の商品で表現されるだけである。しかし、この第二の商品がどんな種類のものであるか、上着や鉄や小麦などのどれであるかは、全くどうでもよいのである。つまり、商品Aが他のどんな商品種類に対して価値関係に入るかに従って、同じ一つの商品のいろいろな単純な価値表現が生ずるのである。商品Aの可能な価値表現の数は、ただ商品Aとは違った商品種類の数によって制限されているだけであって、それゆえ、商品Aの個別的な価値表現は、商品Bのいろいろな単純な価値表現のいくらかでも引き延ばせる列に転化するのである。(p84)

第3節4 単純な価値形態の全体 了 2025/06/23